

第13分科会

連携・接続

研究課題

家庭・地域等との連携と異校種間接続の推進における校長の在り方

1 趣旨

先行きが不透明で、見通すことが難しい現代社会において、子どもたちを取り巻く課題はますます複雑化の様相を呈している。

それらの課題を解決し、子どもたちの望ましい成長を促すためには、学校と家庭・地域が一体となって取組を推進していく必要がある。しかし、地域コミュニティの弱体化に加え、つながりや支え合いの希薄化などにより、本来あるべき地域の教育力が低下してきている。また、子どもの貧困や子育てに不安をもつ保護者の増加など、家庭環境も大きく変化している。そのため、規範意識や他者とのコミュニケーション力が十分に育たず、いじめ等の問題行動の要因の一つになっている。

これらの課題は、学校現場のみならず社会総掛かりで対応する必要があり、望ましい子どもの育成及び、生徒指導上の課題へ対応するための地域基盤を再構築する取組が求められている。

また、「小1プロブレム」「中1ギャップ」と呼ばれる異校種間の接続上の課題も依然として存在する。子どもたちが入学時にうまく学校に適應できるようにするためにも、異校種間の連携をより一層推進する必要がある。

校長は、地域の核としての学校の在り方を学校経営の基盤に位置付け、家庭・地域等との連携、異校種間の連携、それぞれの意味と役割を十分に自覚し、より円滑な接続や教育環境づくりを推進していく必要がある。

本分科会では、校長のリーダーシップの下、子ども一人一人の将来を見据え、家庭・地域等との連携や異校種間の円滑な接続を推進するための具体的な方策と成果を明らかにする。

2 研究発表とグループ協議

研究発表1

【視点①】

家庭・地域等と連携し、特色ある教育活動を展開する学校づくりの推進

【発表題】

地域を生かす、地域で生きる
～持続可能な「ともに」をめざして～
三重県 桑名市立大和小学校 杉浦 裕一

【発表要旨】

学校と家庭・地域が「Win-Winの関係」になる取組を、



子どもの側から見た①地域を生かす学習、②地域で生きる学習の二つに分類して校長の役割を検証する。校長は、地域連携のコーディネーターであり、学校現場の負担軽減のバッファー役でもある。また、子どもたちに「未来の社会形成者としての意識」を醸成する中長期の展望をもてるプロデューサーでもある。この観点から、実践報告の成果と課題を明らかにし、具体的な校長の役割に迫る。

- (1) 地域を生かす～地域力を生かす・地域を学びに生かす～
 - ① 地域力による学習（学校では学べないことを学ぶ、地域の方とのふれあい、居場所づくり）
 - ② 身近な地域の人から生き方を学ぶ学習（郷土愛の育成とキャリア教育の推進）
- (2) 地域で生きる～地域を守る一員として育つ～
 - ① 地域の伝統行事を共に支える学習（子どもが自己有用感を高め、地域人としての役割を知る）
 - ② 地域を守る仲間になる学習（地域防災行事に参加、地域人として日常生活に生かす）

【グループ協議の概要】

【討議の柱①】

地域の強みを生かした基盤づくりと体制づくりの方策

- (1) 理念・目標と活動の意義を共有するための学校経営
 - ① 学校運営協議会や地域学校協働本部からの具体的な取組（安心・安全、環境、学習支援等）を積極的に情報発信して「見える化」にしていくことが共有化には効果的である。
 - ② 学校の実情をよく分かっている退職校長などがコーディネーターをするとスムーズな連携につながる。また、持続可能な連携となるための地域の人材を見付けることは重要である。
- (2) 持続可能な動きと人材育成及び地域づくりの推進
 - ① 学校と各組織をつなぐ人材（カウンターパートナー）の育成が課題である。学校と各組織の連携調整がスムーズにいくことが結果として学校の負担軽減にもつながる。
 - ② 上手くいった教育実践が組織の地固となり、その実践の積み上げが次第に組織として形づくられていくものである。学校に頼らずに地域の人材が主体的に動き出すための実践の積み重ねが重要である。
- (3) 校長の果たすべき役割と指導性
 - ① 地域連携のコーディネーターとして、まずは校長自身が地域の歴史と実情をしっかりと理解することが大切。その上で保護者の願いや思い、職場の実情や子どもの実態を踏まえ、バランス感覚をもって、一部に偏らない取組を心掛けたい。

- ② 学校の負担軽減のバッファー役として教育課程の工夫・改善やチーム学校としての体制づくりを積極的に行うことで、学校の多忙感の縮減につなげていく。

研究発表2

〔視点②〕

成長の連続性を生かした異校種間接続の推進

〔発表題〕

幼児教育との連携や義務教育9年間を見通した小中学校の接続など異校種間のつながり

北海道 別海町立中西別小学校 古森 康晴

〔発表要旨〕

異校種間接続においては、大切なポイントがある。例をあげると「学びをつなぐ」「育ちをつなぐ」「地域をつなぐ」「評価をつなぐ」という4点などである。義務教育学校での取組、コミュニティ・スクール（CS）と関連した小中一貫教育や郷土学習、キャリア教育の取組等、地域の特性をおさえた実践報告を通して、実効性のある校長の役割を検証する。

- (1) 小学校と中学校の連携、一貫した取組の推進
 - 小中一貫教育を進めるためのポイント
 - ① 異校種間の連携と9年間の連続性を生かした取組
 - ② CSとの関わりを生かした取組
- (2) 地域に開かれ、信頼される学校づくりの推進
 - 9年間を見通したキャリア教育を推進している取組
 - ① アンケート調査の実施
 - ② 小・中学校9年間の指導計画の立案

〔グループ協議の概要〕

〔討議の柱②〕

異校種間接続における意識改革と教育課程編成の方策

- (1) 地域の特性を生かした円滑な異校種連携
 - ① 幼保小中連携の書式を作成し、管理職同士が年間の目標や方向性を共有している。(例えば、ネット依存対策や子どもの睡眠についてなど)
 - ② 中学校区の各小学校のCSの代表が集まって、生徒指導上の課題などについて協議している。
 - ③ 子ども像や育てたい力について、小中の校長が話し合う組織をつくり、経営方針などを共有し、9年間で積み上げていくことが必要である。
- (2) 持続可能な取組にする校長のリーダーシップ
 - ① 地域のWin, 学校のWin の取組がどんどん増えていく。



活動を数年間の期間限定にして、PDCAを回し続けるか否かを判断することも一つの方法である。また期間限定にすることでビジョンや目標を明確にでき、子どもの変容が分かり合え、互いの多忙感も払拭できる。

(3) 校長の果たすべき役割と指導性

- ① 教職員に対して取組の意味付けを丁寧に説明し、コンセンサスを得ることに力を注ぐ。体制が整ったら、なるべく黒子に徹し、教職員の達成感を大切する。

3 まとめ

学校は、子どもたちが自立して社会で生き、個人として豊かな人生を送ることができるための基礎となる力を培う場としての役割だけでなく、地域コミュニティの拠点として、地域の将来の担い手としての人材を育成する場としての役割も望まれている。本分科会で明らかになった成果と課題を各都道府県に持ち帰り、「地域とともにある学校」の構築のため、子ども目線の異校種間の緊密な接続のために生かしていくことを確認した。以下、成果と課題を挙げる。

〔成果〕

- (1) 連携・接続に向けた基盤づくり
 - 学校の経営方針や教育活動などを積極的に情報発信するとともに地域や保護者の思いや願いを取り入れる取組がなされている。
- (2) コミュニティ・スクールを生かした体制づくり
 - コミュニティ・スクールの実施に向けた体制づくりが着々と進められている。これを機に活動の見直しを図り、働き方改革にもつなげている。
- (3) 合同研修会や引き継ぎ会等の開催
 - 小・中学校においては、教職員による合同研修会が開催され、生徒指導及び学習指導に関する連携が深まってきている。幼保小の連携が進み、入学前の園児の様子や保護者の願いなどを受信するシステムが築かれてきている。

〔課題〕

- (1) ビジョンの共有化に向けた具体的な方策
 - 地域住民や保護者、中学校と目標や目指す子ども像などの共有化に向けた方策をどのように具体化していくか。また、組織的・継続的な連携・協働のための体制構築に向け、教育行政との具体的な道筋をどう進めるか。
- (2) 教育課程の位置付けと多忙感の払拭
 - 教員の多忙感・負担感を考慮しながら当事者意識を高め、有効な連携・接続を築いていくための手だてをどうするか。また、教育課程の位置付けと時数確保、活動内容の工夫改善の方策と人材育成にどう取り組むか。

